

りびんぐらいぶず 平成二十一(二〇〇九)年六月第四号

ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべし

ご讃題 親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひと(法然聖人)の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり、
(歎異抄、註釈版聖典 P832)」

一、私たちの上には無為涅槃界が直接広がっているばかりです。

本日はようこそご両親の二十三回忌をお勤めになりました。ご主人には随分若くしてご両親を送られました。もう二十三回忌をお迎えになったのですから、お別れになったときは随分淋しい思いをなさったことでしょう。実は私も三年前に父親を送り、またつい先頃、母親を送りました。ようやくご主人と同じ立場にあわせていただきました。

ですので、もう私たちの上には直接、^{むいねはんがい}無為涅槃界が広がるばかりとなりました。その無為涅槃界、阿弥陀如来のお浄土にはどうしたら生まれることができるでしょうか。

浄土真宗は、阿弥陀如来から賜る信心一つによってお救いに与ると言われております。この信心一つというのが容易ではありません。

なぜなら、浄土真宗の信心というのは、世間の一般的な常識で考えられているように、私自身が自らはからいで自分の心の中に意識的に努力して何かを作り上げるという意味での信心ではないからです。

世間の宗教ではしばしばこんなことを耳にします。例えば「今、教祖に三百万円を懇志として上げてもらえれば、三か月後には三倍になって戻ってくる」と、言われてその言葉を鵜呑みにして三百万円を奉納して、三か月がたったとします。しかし、一向に三倍になって戻ってくる気配がありません。そこでその旨

その教団に訴えたとするとうなるでしょう。

「それはあなたの信心が浅いからだ、信心の仕方が足らんからだ」と言われるのが落ちであります。

結局、欲に目がくらんだ自らを恥じてすごすごと引き下がらねばなりません。こうした場合の信心は、自分の心の中に自分が作り上げる信心であります。世間で考えられている信心というのは得てしてこのような信心をいうのであります。

二、浄土真宗の信心は如来様の仰せの通りにお聞かせに与る信心です

一方、浄土真宗の信心というのは自分が自分のはからいで心の中に作り上げるような信心ではありません。

それでは、浄土真宗の信心についてお尋ねすることに致しましょう。何はともあれ、親鸞聖人ご自身はどうおっしゃっているかをお尋ねしてみるのが一番です。

今日、浄土真宗の最もポピュラーな書物の一つに「^{たんにしやう}歎異抄」があります。その歎異抄の中で親鸞聖人は、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられ参らすべしとよき人(法然聖人)の仰せをかぶりて信ずるほかに別の仔細なきなり」と仰せになっています。

これが信心のロジック(論理)です。

信心一つという、その信心のロジックの中に、実は念仏が組み込まれていることにお判り戴けるでしょう。

阿弥陀如来が「わが国浄土に生まれたいと思うてたとえ僅か十遍でもよいからお念仏しておくれ」とおっしゃっていて下さる(第十八願文)のですから、私は、如来様の仰せのとおりにお念仏するのです。

それでは、よい機会ですから、この機会に皆さんと一緒にお念仏を両三度称えてみましょう。両手を合わせてお念珠を頂戴します。

「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と、私の声に合わせて大きなお声を出してお称え下さいませ。

「なんまんだーぶ、なんまんだーぶ、なんまんだーぶ」

そのときです、それまでご本堂を遊び回っていた一、二歳のお孫さんの口からお同行の声にあわせて「まんまーん(なんまんだー)」の声が聞こえてきたではありませんか。

思わず私はご法話の手を止め「なんと有難いことでしょう」とつぶやいたことです。ご法話が終って最後のご挨拶をしているとき、ふと気がつけば、その子をご尊前の私の膝元にきてくれました。

そこでその子に「それじゃ、お手てを合わせましょう、お称えしましょう」というと、紅葉のような両手をあわせてくれたことでした。

思いがけないハプニングでしたが、その日法事にお参りの皆様方の中に和やかで微笑ましい雰囲気広がったことは申すまでもありません。

さて、ただいま、私たちは、南無阿弥陀仏とお念仏をお称えしました。すると聞こえて下さったものがあるはずです。

では、なんと聞こえて下さったでしょうか。私は何も難しいことをお尋ねしたわけではありません。何も難しくお考えになる必要はないのです。

実は「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さったのです。

南無阿弥陀仏と称えれば、南無阿弥陀仏と聞こえて下さったことあります。これは、私の声を通してわが声ながら聞こえて下さった阿弥陀如来直々の御喚(よ)び声であります。

これが、如来様が現にいらっしゃって、ただ今働いていて下さる何よりも証拠に他ありません。

なぜなら、如来様は寿命無量の御本願(第十三願)をお建て遊ばされており、今もその寿命が続いているからだというのが一つの理由であり、

南無阿弥陀仏は本願招喚の勅命(お呼び声)として私に届こうぞとの御本願だった(六字釈、註釈版 P170)というのが今一つの理由だからです。如来様が「お願いだから我が国に生まれたいと願って、たとえ十遍でも称えておくれ」とおっしゃったのですから、称えさせて戴いたのです。すると、御本願の通りに如来様の勅命(私を呼び覚まそうとする御喚び声)が聞こえて下さったことあります。

私には、阿弥陀如来の海のように深く山のように高いご本願の御心まではとても判りませんけれども、如来様が願うて下さるのですから、仰せの通りにお浄土に生まれたいと思うて、念仏させて戴くのです(銘文、註釈版 P655)。かくして、南無阿弥陀仏と称えれば、南無阿弥陀仏と聞こえて下さったことあります。

この聞こえて下さった南無阿弥陀仏のお名号には如来様の果徳のすべてが込められてありますからして、お名号の一人働きによって私たちはお浄土に迎え取られるのです。

聞こえて下さったお名号の一人働きによって、私たちもやがてこの世の命が終わるとき、間違いなく懐かしい両親とお浄土で再開させて戴くことあります。仏説阿弥陀経に「俱会一处(一つとてあわせよう)」と謳われている通りであります。

まことに親鸞聖人のみ教えは、勅命をそのまま頂戴するよりほかに信心なし(勅命の他に領解なし)のみ教えでありました。合掌(玄宥記)。

正覚寺永代経 六月二十日十四時、二十時、お客僧 岡 玲師
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)
〒五二〇 〇五〇一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六
✉-♪ mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥